



淨瑠璃雜考

(二)

秋葉芳美

人形身

前項に續いて、こん度は名古屋に於ける「人形身」即ち身振り狂言の興行について記さう。

天保八年文樂芝居としての危機であつた説經讀語座の一件があつたが、それをよそに、竹本綱太夫一座は名古屋若宮社内芝居(名代松本屋増太郎)で十月から尾上多見之助・中村駒三郎・嵐三枝等の一座をもつて首振り芝居を興行した。御目見得狂言の名題と太夫の受持は次の如くである。

「式三番叟」 千歳 中山 嵐三枝

三番叟 尾上多見之助

かけ合 竹本喜代太夫
竹本壽太夫

竹本内匠太夫

(主な配役・その他省略)

「伊賀越道中双六」

行衛屋鋪 竹本喜代太夫

上杉館 竹本壽太夫

圓覺寺 竹本春太夫
竹本綱太夫

新關ノ段 竹本壽太夫

岡崎ノ段 竹本春太夫
竹本綱太夫

「鬼一法眼三略卷」

鬼一菊畑 竹本内匠太夫

橋辨慶 竹本春太夫
竹本喜代太夫

娘お袖尾
女房おたね

嵐三枝

和田志津摩

中村徳三郎

幸兵衛女房
丹右衛門
妹お市

中村駒三郎

澤井股五郎
母鳴見

市川瀧十郎

政右衛門
澤井城五郎
和田靱負

尾上多見之助

皆鶴姫

中村富代

奴智恵内

中山徳三郎

笠原淡海

嵐壽見藏

鬼一法眼

市川瀧十郎

牛若丸
武藏坊辨慶

市川瀧十郎
中村駒三郎

三味線 鶴澤寛治 淨瑠璃 竹本壽太夫

三味線 同 鶴澤吾八 頭取 尾張屋 音次郎

同 同 留之助

三味線 同 鶴澤源吉

二の替りは十一月七月初日で、番附には初めに名代と竹本の紋（櫓紋）を置き、その下に二行割で名代松本屋増太郎と太夫竹本綱太夫と

あり、次に大名題（大外題）一淨瑠璃 接合線 鉾つぎあはせと署

してある。出しものは「義臣傳讀切講釋」（植木屋の段―豊竹喜代太夫）・「戀女房染分手綱」（子別の段―竹本春太夫）・「双

蝶々曲輪日記」（八幡の段―豊竹喜代太夫・竹本内匠太夫）・

「道中膝栗毛」（赤坂宿屋の段―竹本壽太夫）・「花上野譽石碑」

（志渡寺の段―竹本春太夫・竹本綱太夫）・「關取千兩職」（岩

川内の段―かけ合・竹本壽太夫・同春太夫・豊竹喜代太夫）

で、三味線連名は前記と同じであるが、狂言作者として近松

歌根助が見えてゐる。尾上多見之助その他の配役は省略する

が、この番附には特に大きく「人形身にて御覽ニ入奉候」と

ある。これは人形身振の略で、當時かういふ稱呼もあつたこ

とが知られる。

三の替りは十一月十九月初日で、「淨瑠璃 磯貝右衛門 敵

討御堂前」（大序より大切まで）・「立春姫小松」（大序―豊竹

喜代太夫・二段目口―竹本春太夫・中―竹本綱太夫・切―竹本壽太夫・三段目口―豊竹喜代太夫・切―竹本内匠太夫）・

「ひらがな盛衰記」（關所の段―竹本壽太夫・逆櫓の段口―竹

本春太夫・切―竹本綱太夫・鏡場の段―竹本春太夫）を出し

てゐる。

この首振芝居の座頭を勤めた尾上多見之助は、萬延・文久

元年に大阪御靈裏門の席（櫓下・忠孝昔物語）で、首振芝居

興行に出演した尾上多見之助（近世邦楽年表義太夫節之部・萬延

とは別人で、初代に當る。

若宮芝居の首振芝居は好況であつたらしく翌九年二月（十

四日初日）からは清壽院境内芝居（名代稻葉屋伊八）に移り

子供の方は尾上多見之助・市川瀧十郎等の代りに、嵐橋二郎

市川甚六等が加入し、太夫の方は竹本内匠太夫がぬけて、竹

本錦太夫・同都太夫が加はつた。狂言作者は竹光造と鶴狸助

が見える。初の狂言は「けいせい宮傳授」（大序より大切ま

で）・「伽羅先代萩」（御殿の段―竹本錦太夫）・「三日太平記」

（九冊目・嘉平治住家の段―竹本春太夫）・「勢州阿漕浦」（濱

邊の段―竹本壽太夫・平治住家の段―竹本綱太夫）・「傾城博

多織」（御所屋舗の段―竹本都太夫）で、三味線は鶴澤寛治・

豊澤源吉・鶴澤豊吉・同梅次郎・同巴之助・同松次郎・支配

竹本壽太夫であつた。子供の配役は省略する。

二の替りは三月九月初日で、「三番叟翁千歳」・「けいせい小

倉紙・「蝶花形名歌島臺」(鐵砲屋の段―竹本重子太夫・竹本春太夫・小坂部館の段―竹本錦太夫)・「戀飛脚大和往來」(新町茶屋の段―總かけ合・道場の段―竹本壽太夫・新口村の段―竹本春太夫)・「本朝廿四孝」(三段目口―竹本壽太夫・切―竹本綱太夫・四段目―竹本都太夫)・「増浦兜軍記」(琴責の段岩永―竹本綱太夫・阿古屋―竹本都太夫・重忠―竹本春太夫六郎―竹本重子太夫)の出しもの。

三の替りは四月八日初日で、「淨瑠璃けいせい入相櫻」(盛七株)・「妹背山婦女庭訓」(大序―竹本眞島太夫・鹿殺しの段―竹本重子太夫・芝六内の段―竹本春太夫・竹本壽太夫・三段目掛合―竹本綱太夫・竹本壽太夫・竹本都太夫・竹本錦太夫・杉酒屋の段―竹本壽太夫)・「天網島」(茶屋場の段―竹本春太夫)・「昔八丈」(白木屋の段―竹本都太夫)・「安達原」(三段目口―竹本春太夫・切―竹本綱太夫)・「おしゅん猿廻しの段」(竹本錦太夫)を出し、四の替りは閏四月一日初日で、「南窓里見花魁咎八總」三冊(大序―竹本眞島太夫・二段目口―竹本重子太夫・切―竹本壽太夫・三段目口―竹

本都太夫・切―竹本春太夫)・「國性爺合戦」(樓門―竹本錦太夫・甘輝館―竹本都太夫)・「木下蔭狭間合戦」(勘兵衛陳家の段口―竹本壽太夫・切―竹本綱太夫)・「姫山姥」(御殿、道行―かけ合―竹本都太夫・竹本春太夫・竹本壽太夫)を出してゐる。かく前後凡そ半ケ年ほどの興行を續けた點に見るも、この首振芝居が如何に歡迎されたかが窺はれる。もとよりこれが名古屋に於ける首振芝居の最初ではなく、この前にも、この後にも首振芝居の番附はあるが、かほどに長い興行を續けた番附を見ないのである。

因に女役者・又は女舞踊家等の身振り狂言について言ひ及んだものがないやうに思ふので、次にそれを記しておかう。これも首振り芝居流行の餘波と見られ、女役者のそれは既に文久頃から行はれてゐるが、こゝには明治の變つた二三について記さう。さて明治七年十月上旬若宮末廣座で、座本荒木小兵衛・興行人信濃屋卯八の名義で、豊竹巴太夫・三味線鶴澤友治郎一座と西川鯉三郎の女名取門弟西川ゆう・西川小鈴等との身振り狂言が興行されて大入であつたといふ。その時の番附を寫すと次の如くである。

(其 一)

寶ノ入船	豊竹巴代太夫
朝顔日記	久郎兵衛
濱松ノ段	竹本登和太夫
久作	西川小鈴
西川小鈴	西川小鈴

これが好評なために明治九年十一月から翌十年一月にかけて、再び末廣座で、豊竹巴太夫・竹本紋太夫・竹本むら太夫・鶴澤友治郎・鶴澤傳吉等の一

白石 七ツ目	竹本 淀太夫	忠臣 藏口切 山科ノ段 豊竹本 淀太夫	中 入	お染 久松野 崎村 竹本 茂太夫	兜軍記 琴責の段	あこ や 竹本 茂太夫	重忠 豊竹本 巴太夫	岩永 竹本 嶋戸太夫	三味線 鶴澤友 治郎	ツレ 鶴澤傳 吉	三曲 つる澤 重吉	三味線 鶴澤友 治郎	三 鶴澤小 庄	鶴澤太 吉	鶴澤鐵 二郎
-----------	-----------	---------------------------------	--------	------------------------------	-------------	----------------------	------------------	------------------	------------------	----------------	-----------------	------------------	---------------	----------	-----------

あこ や	小せ う	お染 忠母	重兵衛 藏	本兵衛 藏	娘お かき	小な み	大福や 宗六	娘お そめ	娘し のお	半澤 六郎	重次 郎	おは ん	おさ まき	娘お みつ	久松 母	下女 りん	百姓 一作	大星 力彌	明智 光秀	大星 由良之 助	宮城 つ	久
西川 小鈴	西川 ゆう 治る	西川 鍵治	西川 鍵治	西川 鍵治	西川 鍵丸	西川 鍵丸	西川 しや う	西川 しや う	西川 鈴吉	西川 鈴吉	西川 あつ	西川 あつ	西川 照吉	西川 照吉	西川 貝治	西川 貝治	西川 京治	西川 京治	西川 房吉	西川 房吉	西川 玉吉	西川 玉吉

座と同じく西川鯉三郎の女門弟西川久吉・西川力益等との興行がなされた。出し物は「三番叟四季の錦綿」・「寶ノ入船」・（以下狭間合戦）「忠臣講釋（八）」「安達原（三）」・「狭間合戦（九）」・「菅原傳授」（松王内の段）・「一谷嫩軍記」（須磨の浦・檀特せん・陣屋の段）・「大經師昔曆」（内の段）・「男作五鴈金」（芝居場より）（安治川橋まで）で、振附が西川鯉三郎作者も西川和光（鯉三郎の別號）と番附にある次の出しものは「寶入船」・「太功記」（十冊目）・「白石嘶」（七ツ目）・「伊賀越」（六ツ目）・「中將姫」（以上素）・「梶ノ由兵衛」（内の段）・「八陣守護城」（毒酒船の段・本城の段）・「伊勢音頭」（酒屋の段）・「廊文章」（吉田屋の段）で、一月上旬のが「妹背山婦女庭訓」（大序御殿場）・「攝州渡邊橋供養」（四段目）まで）・「蘆屋道滿大内鑑」（信田の段）であつた。

線	鶴澤傳吉	鶴澤傳之介	鶴澤重吉	鶴澤伊達造
岸澤長唄はやし連中				
床頭取	竹本小太夫			
千秋萬歳大々叶				

竹澤團六

おいし	西川玉吉
松下嘉平治	西川ゆう
銀八	西川ゆう
女房となせ	西川ゆう
岩永左衛門	
狂言方	勝勝す輔
ふり附	西川鯉三郎
頭取	西川進藤

(其二)

寶ノ入船	豊竹巴代太夫
加賀見山	竹本登和太夫
草履打ノ段	竹本淀太夫
同	竹本嶋戸太夫
長局ノ段	竹本梅壽軒
百度平	竹本梅壽軒
住家ノ段	竹本梅壽軒
昔八丈	竹本梅壽軒
白木屋ノ段	竹本梅壽軒
伊賀越	口竹本淀太夫
ハツ目	切豊竹本巴太夫
中入	

しづま	西川小鈴
番頭丈八	西川小鈴
八重垣姫	西川小鈴
小姓右門	西川小鈴
左治馬ノ守	西川小鈴
山田幸之進	西川小鈴
白木屋庄兵衛	西川小鈴
娘おむめ	西川小鈴
娘お袖	西川小鈴
中老尾上	西川小鈴
娘お駒	西川小鈴
もとめ	西川小鈴

明治十一年二月には末廣町愛榮座で一月の竹本越路太夫、豊澤團平一座のみどり淨瑠璃の後をうけて、竹本重太夫・竹本濱太夫・竹本茂太夫・豊澤新左衛門・鶴澤豊吉等の一座と、やはり西川久吉・西川小八重等の西川鯉三郎の門弟で、三月に亘つて興行した。但し振附は吉田小辰造とある。二月の出し物は「寶入船」・「日吉丸」(三段目)・「菅原」(四ツ目・以上みど)・「菅原傳授」(櫻丸腹切の段)・「御所櫻堀川夜討」(侍従太郎屋敷の段)・「碁太平記白石嘶」(新吉原の段)・「櫻鏑恨蛟鞘」(鰻谷の段)・「繪本太功記」(尼ヶ崎の段)・「壇浦兜軍記」(琴責の段・かけ合)で、三月のは「三代記」(ハツ目)・「大安寺堤段」・「彦山権現」(毛谷村の段・以上みど)・「花上野譽礎」(志渡寺の段)・「姫山姥」(廓嘶の段)・「奥州安達原」(袖萩祭文の段)・「増補萬代會我」(新靱八百屋の段)・「忠臣蔵」(七段

廿四孝 十種香ノ段		竹本茂太夫
橋辨慶雪牡丹二人石橋		
かけ合	竹本梅壽軒	
石橋	西川小鈴	
牛若	西川玉吉	
辨慶	西川鍵治	
石橋	西川ゆ	
三味線	鶴澤友治郎	
三	鶴澤小庄	
味	鶴澤鐵二郎	
線	鶴澤傳之介	
鶴澤伊達造	鶴澤重吉	
岸澤長唄はやし連中		
床頭取	竹本小太夫	
千秋萬歳大々叶		
頭取	西川進藤	
ふり附	西川鯉三郎	
狂言方	花勝や勝す輔	
唐木政右衛門	西川ゆ	
長尾照虎	西川ゆ	
奴百度平	西川玉吉	
ぬれ衣	西川玉吉	
うばお辻	西川房吉	
幸兵衛女房	西川房吉	
局岩藤	西川京治	
白須賀六郎	西川京治	
馬士が八	西川貝治	
長尾謙信	西川貝治	
喜田勝頼	西川照松	
女房お谷	西川照松	
とし元早枝	西川大悦	
坊太郎	西川あつ	
髪結才三郎	西川鈴吉	

目・かけ合)であつたが、番附に「十三日大入」と書入れあるところを見ると、相變らず好況であつたのであらう
更に明治十五年九月には大須眞本座(太夫元山本佐七良)で、「淨瑠璃身振狂言」(番附)と名乗り、竹本紋太夫(三味線竹澤扇造)・竹本淀太夫(三味線竹澤宗之助)・竹本識太夫(三味線竹澤相馬)・竹本豊島太夫(三味線鶴澤市十郎)・竹本綱代太夫(三味線同上)等の一座と、小米・小濱・笹尾・鍵治等とで演じた。出し物は「鬻仇討」(天神堤の段・饒別の段)・「御所櫻」(辨慶上使の段)・「繪本太功記」(尼ヶ崎の段)・「浦里明鳥」(山名屋の段)・「矢口時次郎」(頓兵衛住家の段)・「本朝廿四孝」(狐火の段・總掛合)・「朝顔日記」(宿屋の段・大井川の段)・「三勝女舞衣」(酒屋の段)・「阿波の鳴門」(十郎兵衛住家の段)・増補忠臣蔵「本藏下屋鋪の段」・「伊勢音頭」(油屋の段)・「兜軍

記(零責の段)で、振附は千之助とある。

前掲の例に見るも、當時名古屋に於ける女性の身振り狂言は人氣を博したらしい。またこれは餘談ではあるが、名古屋西川流の始祖西川鯉三郎が先に、即ち明治六年若宮末廣座で「吾妻能組」と名乗つて、能・狂言より攝取した「翁(西川小八重等)・「高砂(西川梅吉等)・「田村(西川鯉吉等)・「羽衣(西川虎等)・「小鍛冶(西川鐵治等)・「虹葉狩(西川幾等)・「鶴亀(西川鈴吉等)・「櫻川(西川虎等)・「土蜘蛛」・「望月」(共に西川梅吉等)・「船辨慶(西川種吉等)・「靱猿(同上)・「三人唐人(西川幾等)・「末廣(西川種吉等)」(以上地は長唄・岸澤・淨瑠璃)等を見せ、いま亦身振狂言に振附して西川流舞踊の中に加へたことは、須が舞踊に對する廣い伎倆の力量を察知され、且つ斯流の動向をも窺ひ知られるのである。而して彼が一世一代の「舞さらゑ」の時は(明治九年六月十一日より十

日間・新)多くの淨瑠璃物が出しものの中に見出される。その例を示すと、「信田妻」・「梅川忠兵衛」・「お染久松」(藏の段)・「忠臣藏」八段目(戸無瀬小)・「一ノ谷」(敦盛熊)・「日高川」・「廿四孝」(狐火)・「千本櫻道行」・「同御殿」・「桂川」(道行)・「橋辨慶」・「お七」・「妹背山」・「大江山」(山姥)・「曾我夜討」・「十二段」等である。

淨瑠璃身振

前項に記した番附の中に「淨瑠璃身振狂言」といふのがあ
るが、この稱呼は明治に入つてからのものであるらしい。私
藏の番附では明治九年五月大阪元長州屋敷小家で演じたもの
が古く、番附には櫓下のところに大きく「淨瑠璃身振」との
みある。その他を番附通りに示すと、

前狂言 恭 太平記 白石噺

全五冊

大

序

明神森之段

豊竹光太夫
豊竹篤の太夫
豊竹悦太夫
竹本勇太夫
竹本小賀太夫

金谷谷五郎
女房おわさ
八重垣姫
百姓與茂作
女房おさよ
茶やぼしのぶ
柳娘しのぶ

市川右田松
中村鶴丸
中村千松

この類は席や小屋でまだ二三興行
したのであるが、京都の分を次に示さ
う。それは新京極通誓願寺櫻之町高の
家(男坂井座)で明治十三年から、十
五年に亘つて定打に續けられたもの
(私藏の番附)と思はれる。座本は玉川
文樂で、番附の櫓紋を置く所に「淨瑠

田植之段	逆井村之段	浅草之段	新吉原之段	御所櫻堀川夜討	侍從太郎 編緋之段	本朝廿四孝	謙信館之段	三	味	線
豊本竹田古太夫	竹本濱尾太夫	竹本小賀太夫	豊竹十九太夫	三役目	竹本濱尾太夫	四役目	豊竹田古太夫	豊澤松太郎	鶴澤新三郎	鶴澤小仙
辰造伴辰太郎出遣ヒニ而相勸申候										

百姓 烟作	奴いせい丹宮榮助	志賀重藏	原小文次	長尾景勝	宇治正雪	侍從太正郎	ぬれきね	禿しげり	百姓 勤作	こし元どりのぶ	禿賀團七	志賀謙信	上杉謙信	百姓 百助	けいせい宮里	奥いせい宮の	竹田勝より	庄や七郎平	武蔵黒坊辨慶	大切 戻り 駕	禿 一日 替り
市川喜代松	中村駒藏	市川有笑	市川瀧松	市川新若	中川小鶴	中村駒梅	片岡鶴太郎	中村駒次郎	尾上多井丸	中村千代松	中村仲之助										
市川右田松丸	市川新若	中川小鶴	中村駒梅	片岡鶴太郎	中村駒次郎	尾上多井丸	中村千代松	中村仲之助													

璃身振」とある。晝夜二部制で、淨瑠璃は竹本瀧太夫・同麟太夫・同九重太夫・同九重太夫・同入太夫・同篤太夫等・三味線は鶴澤伊達藏・同文作・同寛八・金澤藏吉等、十四年秋から豊竹靱志太夫・竹本組榮太夫・竹澤彌十郎等が加入してゐる。子供役者は中村小陣・實川菊三郎・尾上三五郎・同歌女市川新造・浅尾關五郎・中村玉太郎・同小正・玉川榮太郎等といふ顔觸れ、十四年から浅尾大三郎・同朝松・尾上梅松・竹澤萬吉等が加入した。淨瑠璃作者は竹本飛雀軒・狂言作者は佐橋玉助・小林文家軒等で、頭取は玉川喜八出しものゝ變つてゐるのを擧げると、
 「いろは假名四谷夢語」(大序より敵討迄・十三年)・「當世色合石川染」(御談切「春色梅開曆」(盛樹五本・淨瑠璃の外に鶴賀馬蝶・以七十四)「時代鏡梅腰」(大序等出演・年二月)「寺小屋兵助内」(大切)・「極彩色娘扇」(段・清水増井の段)

頭 取 豊澤兵吉	はやし 坂東社中
竹本小賀太夫	頭 取 市中瀧助
鶴澤友之助	千穠萬歳樂大々大人叶吉日

鶴澤友之助

藏（大序より）・「庚申宵待八百屋献立」（八百屋の段）・「鏡山舊錦繪」（長局の段）・「敵討襷襦錦」（大安寺の段）・「碁太平記白石」（新吉原の段）・「近頃河原の達引」（猿廻の段）

「壽式三・神遊岩戸賑」（以上十四年九月）・「釋迦八相倭文庫」（續六

冊）・「夢結蝶鳥追」（五冊・以上十四年十月）・「復讐湖水曙」（大序より）

「薦葛蔓浪花横櫛」（藤ヶ谷天神の段より）・「伊賀上野」（編頭安殺しの段まで）・「伊賀上野」（以上十四年十一月）

「譽仇討」（大序より）・「比翼鳥邊山」（讀本）・「淨るりの外に」（鶴賀馬）

「倭假名在原系圖」（蘭平物）・「以上十五」等で、「米八丹次郎」（梅

曆）・「雪駄直し長五郎」・「切られお富」・「新鏡山」・「テレメ

ン」など歌舞伎物を淨瑠璃に仕立て、大夫が語つてゐるのは注目すべきことであらう。

また明治十三年新京極藥師福の家席では、やはり晝夜二

部制で、竹本離太夫・同九重太夫・同嶋戸太夫・同若重太夫

同玉太夫等・三味線鶴澤友三郎・同傳造・竹澤彌六等の一座

と女役者中村駒榮・市川小富・市川九女・同小定・同小照・

嵐千代吉等の一座とが、淨瑠璃身振狂言を興行してゐる。作者は佐橋正雅で、頭取は柴田軒。出しものは「假名手本忠臣

段」（以上）・「西國順拜」（三十三所觀音靈驗記）・「觀音靈驗

記」の晝之部に竹本離太夫（三味線竹澤彌六）が「壺坂」を

語つてゐるが、これは名人豊澤團平作曲のそれとは異なるも

のと考へられる。福の家席の身振狂言はいふまでもなく、高

の家席との競演であつたが、福の家席の方が早々敗れて長く

續かなかつたらしい。

「淨瑠璃身振」の語は、恰も「操り淨瑠璃芝居」・「淨瑠璃操

り座」等を明治に入つて「人形淨瑠璃」と改めた如く、「首

振り」・「人形身振り」・「人形身」等を明治式に改めたものと

思はれる。

豫定原稿

子供操狂言 （次號）

宗輔、蛙文等の歌舞伎脚本

豊竹應律について

宿無團七上演年代考